

伊庭想太郎編(4)

青春時代

剣と心の修養に励む

伊庭想太郎の兄八郎の生涯を綴った小説に、池波正太郎著『幕末遊撃隊』と中村彰彦著『遊撃隊始末』がある。八郎の最期について、前者は「流弾説」、後者は「服毒説」を採っている。

箱館戦争のころ、想太郎(幼名・亥朔)は17、8歳の少年である。池波の小説には、「猪作」の名で登場する。

幕府の遊撃隊士として、江戸を出立する八郎が猪作に言う。「これからは、お前が、伊庭の主になったつもりで剣をみがき、心をみがかねばならぬ。たのむぞ」

実は、想太郎も箱館戦争に赴いたという説がある。しかし、それを裏付ける有力な史料は見当たらない。ここは、練達の小説家の描いた情景がむしろ現実を映しているのではないか。伊庭道場で9代当主の養父秀俊を支えながら、兄の武運を祈り、心身の修養に努めていたのではないか。

八郎の従者鎌吉の証言

八郎の最期を看取った従者、荒井鎌吉の証言については前述した。あれは、だいぶ後の明治32年(1899)9月、旧幕府史談会での証言だった。史談会は旧幕臣の評論家戸川安宅(雅号・残花)の主宰で、往時の関係者の談話、回想などをまとめ、『旧幕府』全5巻を刊行している。

鎌吉の証言の場に、実は想太郎も同席、回想を語っている。星亨刺殺事件の2年前のことである。

想太郎は語る。「兄の事を申し上げようかと存じましたが、何分私が少年の時でした、(略)兄の脱走後の事は存じませず…」=『旧幕府』第3巻第8号。脱走とは無論、蝦夷地へ赴いたことを指す。この証言から、やはり想太郎自身は箱館に行かなかったことがうかがえる。

小田原藩兵を相手にした箱根の戦いで、八郎が左腕を失った時のことについて、八郎から聞いた話も紹介している。



維新研究の史料として貴重な『旧幕府』

「兄の八郎は敵に斬られながらも、その敵を斬り倒しました時に、刀勢が余って岩を斬ったそうです。(略)兄も申しました。竹刀の勝負で考える故に斬れることを心配するが、実地には中々斬れるもので、余勢が岩を斬る位だと云いました」

箱館戦争が終結、新政府のもとで、伊庭一家が静岡に退いていたころのこと。「鎌吉は兄の着て居ました葵の御紋の洋服と髪の手を持って静岡へ参りました。(略)遺品などを見まして母も安心致しました」

鎌吉の話聞いて、畏敬する兄八郎の英姿は、想太郎の心に深く刻み込まれたことだろう。

榎本も通った上野の「鳥八十」

余談ながら、鎌吉が料理人を務める上野広小路の「鳥八十」は、後に新政府で栄達の道を歩む榎本武揚のひいきの店となる。

下谷御徒町で育った少年時代の榎本と、「鳥八十」の女房が幼なじみだったという縁もあったらしい。「(榎本は)上野近傍に馬車をまげられる節は必ず鳥八十に立ち寄りて、一盃を傾け昔語り時に時を移して立ち帰る由」と、読売新聞記事(明治24年7月31日付)にある。

鎌吉を座敷に呼んで、八郎をしのんだこともあったかもしれない。